The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	マア語におけるTA標識の文法化
Author(s)	安部, 麻矢
Citation	スワヒリ＆アフリカ研究. 2019, 30, p. 1-13
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72914
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

マア語における TA 標識の文法化[1]

安部　麻矢

1　はじめに

マア語（Ma’a/Mbugu とも）はタンザニア北東部の西ウサンバラ山地で話されている言語である。マア語には二つの変種があり、そのうちの一つは先行研究においては「混合言語」と呼ばれてきたもので、バントゥ諸語に多くみられる名詞クラスと動詞類接頭辞の一致システムを持ちながら、特に基礎語彙に非バントゥ言語起源とみられる要素を多くもつ（以降は内マア語（KN）と呼ぶ）[2]。もう一方の変種はバントゥ諸語のひとつのパレ語（Pare, G22）と非常によく類似している（外マア語（KK））[3]。これら二つの変種の形態・統語体系はほぼ同一で、差異は主に語彙（特に内容語）　の面にみられる。

本論文ではテンス・アスペクト（TA）標識が入るべき位置にあらわれる 3 つの要素の文法化について論じる。

2　マア語の TA 標識

本論文における TA の議論の対象は、接辞として文法化された TA 標識を含む定動詞である。テンスとアスペクトの定義は Comrie（1976、1985）に拠る。テンスは時間を直線とみなした時間軸における 1 点を指し、述語が表す事態が起こった時間を発話時からの位置で示すのが絶対テンスで、述語で表す事態が起こった時間からの位置で示すのが相対テンスである。アスペクトは完了・未完了・進行など、述語が表す事態の内的な時間の局面を指す。マア語の TA は、バントゥ諸語に一般的に見られるように、動詞語幹の前（目的語

---

[1] 本論文は、筆者が 2015 年 7 月～8 月と 2018 年 8 月にタンザニアのルショト郡で実施した現地調査に基づいている。筆者の研究は、日本学術振興会科学研究費助成金（特別研究員奨励費）「アフリカ諸言語の言語接触に関する記述調査研究－タンザニア・マア語の 2 変種を中心に」（課題番号: 14J40066　研究代表者: 安部麻矢）及び「タンザニア・マア語の 2 変種の社会言語学的記述研究－言語接触の視点から－」（課題番号: 17J01084、研究代表者: 安部麻矢）の助成を受けている。

[2] Mous （1994, 2003） ほか。

[3] 先行研究（Green 1963、Besha 1974、Mous 2003 など）はマア語が経験した言語接触のプロセスについてそれぞれに異なる考察を提示しているが、マア語がクシ系言語とパレ語との言語接触により成立したという点については意見が一致しており、筆者も同様の立場をとっている。より正確を期すれば、マア語の形態・統語体系はパレ語のものを借用していると言える。

接頭辞か再帰接頭辞がある場合はその直前）か動詞語幹の後にあらわれる TA 標識によりあらわされる。また TA には、ひとつの定動詞であらわせるもの（「単純形式」）、単純形式の中で TA 標識が 2 つ用いられているもの（「複接頭辞形式」）、2 つの定動詞であらわすもの（「複合形式」）がある。本論文では単純形式にみられる TA 標識を議論の対象とする。

定動詞は以下のような構造を持つ。太字の部分が必須要素である。

動詞語幹

S/NegS－TA－O/REF－**動詞語根**－動詞派生接尾辞－FV/TA

表 1 はマア語の TA の一覧である。母音終わりの動詞語根には、終母音（FV）と未来の否定形の形式にあらわれる *-é* が付加されないため、括弧つきで示している。

表 1　TA の形式

	絶対テンス	肯定形	否定形
1	過去 1	S-V-*je*/*íe*	NegS-V- *je*/*íe*
2	過去 2/完了	S-*áa*/*ée*-V-(FV)	NegS-*na*-V-(HFV)
3	現在	S-Ø-V-(FV)	NegS-Ø-V-(FV)
4	未来	S-*ne*-V-(FV)	NegS-*ka*-V-(é)
	相対テンス	肯定形	否定形
1	継起 (直説法)	S-*ka*-V-(FV)	
2	継起 (接続法)	S-*za*/*ze*-V-(FV)	
3	条件	S-*kú*-V-(FV)	HS-*kú*-*sáa*-V-(FV)
4	条件 (過去)	S-*he*-V-(FV)	
	アスペクト	肯定形	否定形
1	進行	S-*ta*/*te*-V-(FV)	
2	継続	S-*ra*/*re*-V-(FV)	
3	習慣 1	S-V-(HFV/HFV)-FV	NegS-V-(HFV/HFV)-FV
4	習慣 2	S-*túwa*-V-(FV)	NegS-*túwa* -V-(FV)

実際の動詞の構造は以下のとおりである。(1) は「過去 2/完了」の肯定形の例、(2) は「過去 2/完了」の否定形の例である[4]。

(1)

KN	n-áa-ʔá	viʔagú	vjá	tʃáakakó
	S.1SG-PST$_2$-食べる	CL8.食物	GEN.CL8	昼
KK	n-áa-l-á	kidʒó	tʃá	tʃéhéṃsí
	S.1SG-PST$_2$-食べる-FV	CL7.食物	GEN.CL7	昼

「私は（もう）お昼ごはんを食べた。」

(2)

KN	sí-na-ʔá	viʔagú	bádo
	NegS.1SG-NegPST$_2$-食べる	CL8.食物	まだ
KK	sí-na-l-á	kidʒó	bádo
	NegS.1SG-NegPST$_2$-食べる-FV	CL7.食物	まだ

「私はまだごはんを食べていない。」

3 TA 標識の文法化

表 1 で挙げた TA 以外に、 通常 TA 標識が置かれる位置にあらわれる、*-tʃéri-*、*-roNga-*、*-maNga-* という 3 つの要素がある。本節ではこれらの 3 つの要素について分析・考察する。

---

[4] マア語の音素は以下の通り。括弧内の音素は内マア語にのみ見られる。p, b, t, d, tʃ, dʒ, k, g, (ʔ), f, v, s, z, ʃ, x, ɣ, h, m, n, ɲ, ŋ, r, l, (ɬ), j, w, i, e, a, o, u。このほか、調音点と有声性に関しては未指定で、鼻音性のみが指定されていると考えられる N を持つ。この音素は口閉鎖音の直前にのみあらわれ、調音点と有声性は常にその閉鎖音と一致する（[m̥p], [mb], [n̥t], [nd], [ŋ̊k], [ŋg], [ŋv] など）。この N は内マア語・外マア語共にみられる。

例示のグロスの略号は以下の通り。 CL: 名詞クラス番号, DEM: 指示詞, FV: 終母音, GEN: 属辞, HFV: 高トーンを持った終母音, HS: 高トーンを持った主語接頭辞, NegFUT: 否定の未来. NegPST$_2$: 過去 2 及び完了の否定, NegS: 否定主語接頭辞, O: 目的語接頭辞, PFT$_1$: 完了 1, PL: 複数, PRS: 現在, PROX: 近称, PST$_2$: 過去 2 及び完了, REF: 再帰, S: 主語接頭辞, SG: 単数, SUBJ: 接続法, TA: テンス・アスペクト標識, V: 動詞語根

3.1　先行研究

上記の*-tʃéri-*、*-roNga-*、*-maNga-* という 3 つの要素について言及しているのは、Mreta (1998) と Mous (2003) である。Mreta (1998: 123-34) はパレ語の TA の形式及び *-cheri* と *-ronga*[5] について言及している。 Mous (2003: 136-37) は上記の 3 つの要素すべてについて言及している。以下では Mreta 及び Mous の記述と比較しながら、マア語におけるこれら 3 つの要素について考察する。

3.2　"unfinished action" *-tʃéri-*

Mreta (1998: 123) は *-cheri* を "still" とラベル付けし、「まだ起こっている、もしくは進行中の状況を示す」と説明し、(3)　のような例を提示している[6]。

(3)　é-chéri-im-a

S.3SG-still-耕す-FV

「彼／彼女はまだ耕している。」

Mreta (1998: 123-24) は、*-cheri* は本動詞が後続することで助動詞のようにあらわれるとし、動詞の不定形もしくは主語接頭辞が後続しないことから、TA 標識であるとしている。

Mous (2003: 137) は、*-tʃéri-*　について、動作がいまだに進行中であることを強調する意味を持つ、現在の未完成の「テンス」標識であるとしている。Mous (2003) には *-tʃéri-*　を含む例は挙げられておらず、また *-tʃéri-* のあらわれる環境についても説明はされていない。

筆者の調査においても、*-tʃéri-* を含む形式は、継続する出来事を表すのに用いられ、「まだ～している」という意味を持つ。表 1 の「継続」のアスペクトと同じ意味を持つようだが、細かい違いはまだ明らかにできていない。

(4)

KN	vé-tʃéri-sóm-a	kitábu	já	bádo
	S.3PL-tʃéri-読む-FV	CL7.本	DEM.PROX.CL1~15	まだ

[5] 先述の通り、マア語はパレ語と非常に類似しており、Mreta (1998) の *-cheri* と *-ronga* はそれぞれ本論文における *-tʃéri-*、*-roNga-* に相当する。
[6] 以降のパレ語の例のグロスは本論文の表記に合わせている。

KK　vé-tʃéri-sóm-a　kitábu　ítʃì　bádo

S.3PL-tʃéri-読む-FV　CL7.本　DEM.PROX.CL7　まだ

「彼らはまだこの本を読んでいる。」

否定の場合は、「まだ～して（～し終わって）いない」、つまり未完了の状態が継続しているという意味を持つ。

（5）

KN　tetú-tʃéri-búku　maʔí

NegS.1PL-tʃéri-汲む　CL6.水

KK　tetú-tʃéri-táha　NpoNbe

NegS.1PL-tʃéri-汲む-FV　CL9.水

「私たちはまだ水を汲んでいない（汲み終わっていない）。」

先述のように、Mreta (1998: 124) は、パレ語では *-cheri* は動詞の不定形は後続しないとしているが、マア語では、筆者の調査において、（6） のように動詞の不定形が後続する例も収集されている。

（6）

KN　tetú-tʃéri　ku-búku　maʔí

NegS.1PL-tʃéri　CL15.汲むこと　CL6.水

「私たちはまだ水を汲み終わっていない。」

3.3 “hortative” *-roNga-*

次に、*-roNga-* についてみていく。

Mreta (1998: 123) は （7） のような例を挙げ、グロスには “FIRST” とラベル付けをし、*-ronga* を含む動詞が表す動作を最初にするつもりであることを示すとしている。

（7） é-ronga-im-a

S.3SG-FIRST-耕す-FV

「彼／彼女はまず耕す（つもりだ）。」

Mreta (1998: 124) は *-ronga* についても、動詞の不定形もしくは主語接頭辞が後続しないことから TA 標識であるとしている。

Mous (2003: 137) では *-réngé-* として挙げられており、ほかにバリエーションとして、*-ronge-*、*-ranga-*、*-ronga-* を持つとし、いずれも "FIRST"とラベル付けがされ、（8）のような内マア語の例が挙げられている。*-réngé-* のあらわれる環境についての説明はされていない。

（8） ni-réngé-kúru

S.1SG-FIRST-耕す

「私はまず耕す。」[7]

Mous (2003: 137) の記述と同じく、筆者の現地調査においても、この形式は「まず～する」という意味を持つという結果が得られている。

（9）

KN tu-roNga-búku maʔí

S.1PL-roNga-汲む CL6.水

KK tu-roNga-táh-a NpoNbe

S.1PL-roNga-汲む-FV CL9.水

「私たちはまず水を汲む。」

マア語の接続法では、「継起」の *-ka-* 以外の TA 標識はあらわれない。また、接続法接尾辞 *-e* は動詞語幹に後続する。しかし、*-roNga-* は接続法においても用いることができ、

[7] Mous (2003: 137) はこの例について、 'I cultivated here first.' という訳をつけているが、'here' に当たる副詞がなく、また「過去」の TA 標識もないため、筆者により、現在の文と解釈した。グロスは筆者による。

接続法接尾辞 *-e* は、動詞ではなく、*-roNga-* の語尾に付加され、*-roNga-* が *-roNge-* になる。(10) は通常の接続法の文である。外マア語の例が示すように、接続法語尾は動詞語根 *-táh* に付加されている。

(10)

KN tú-búku maʔí

HS.1PL-汲む CL6.水

KK tú-táh-e NpoNbe

HS.1PL-汲む-SUBJ CL9.水

「水を汲もう。」

一方、(11) は *-roNga-* を含む接続法の例である。接続法語尾は動詞ではなく *-roNga-* に付加され、*-roNge-* となっている。

(11)

KN tú-roNgé-búku maʔí

HS.1PL-roNga;SUBJ-汲む CL6.水

KK tú-roNgé-táh-a NpoNbe

HS.1PL-roNga;SUBJ-汲む-FV CL9.水

「まず水を汲もう。」

また、*-roNga* は他の TA 標識とともにあらわれる。 下の (12) は否定の「未来」の TA 標識の *-ka-* とともにあらわれる例である。「未来」の否定の形式では、終母音は高トーンを伴う *-é* に変わるが、(12) で *-é* に変わっているのは、(11) と同様に、動詞ではなく、*-roNga-* の部分である。

(12)

KN tetú-ka-roNgé-búku maʔí

NegS-NegFUT-roNga;SUBJ-汲む CL6.水

「私たちは最初に水を汲まないだろう。」

未来の否定の TA 標識 *-ka-* は通常は他の TA 標識と共起しない。このような接続法と「未来」の否定の形式における *-roNga-* のふるまいから、*-roNga-* は TA 標識というよりは、動詞的な性格を有しているといえる。

3.4 "speed" *-maNga*

最後に、*-maNga* についてみていく。 Mreta (1998) には *-maNga-* についての記述はない。Mous (2003: 137) は、*-maNga-* について、急ぐ意味を加えると説明し、（13）と（14）のような内マア語の例を挙げている[8]。

（13）é-maNgá-kúru

S.3SG-SPEED-耕す

「彼/彼女は急いで耕している。」

（14）maNgá　só

SPEED　IMP.leave

「急いで発ちなさい。」

Mous と同じく、筆者の現地調査でも、この形式は「急いで～する」という意味を持つというデータを得ている。以下に筆者が収集した例を挙げる。

（15）

KN　tu-maNga-ʔá　viʔaɣú

S.1PL-PRS-maNga-食べる　CL8.食物

KK　tu-maNga-l-á　vidʒó

S.1PL-PRS-maNga-食べる-FV　CL8.食物

「私たちは急いでごはんを食べる。」

[8] 表記は本論文のものに改めている。また、(14) のグロスは、Mous (2003: 137) の英語の訳から筆者が付与した。

Mous はこの「アスペクト」標識を含む否定の形式を挙げていないが、筆者の現地調査では、否定の形式の例も収集されている。否定は NegS-*maNga*-V-(FV) という形式を持つ。

（16）

KN tetú-maNga-ʔá viʔaɣú

NegS.1PL-maNga-食べる CL8.食物

「私たちは急いでごはんを食べない。」

また、*-roNga-* の場合と同じく、*-maNga-* も接続法のなかで用いることができ、接続法接尾辞は、動詞ではなく *-maNga-* に付加される。（17）は通常の接続法の例で、（18）は *-maNga-* を含む接続法の例である。

（17）

KN tú-ʔá viʔaɣú

HS.1PL-食べる CL8.食物

KK tú-l-é vidʒó

HS.1PL-食べる-SUBJ CL8.食物

「ごはんを食べよう。」

（18）

KN tú-maNge-ʔá viʔaɣú

HS.1PL-maNga;SUBJ-食べる CL8.食物

KK tú-maNge-l-é vidʒó

HS.1PL-maNga;SUBJ-食べる-FV CL8.食物

「急いでごはんを食べよう。」

Mous（2003: 137）は *maNga-* を含む命令法の例を挙げているが、複数の人間に対する命令法の例は挙げていない。筆者の現地調査で収集したデータによると、複数の人間に対する命令法の場合、複数を表す*-ni* は命令法の動詞語幹に付加されるが、*-maNga-* を含む命令法の場合、*-ni* は動詞語幹 *-búku* ではなく、*-maNga-* に付加される（（19）参照）。

（19）

KN　maNgá-ni　búku　maʔí

maNga-PL　汲む　CL6.水

「急いで水を汲んで来なさい（複数の人間に向かって）。」

上記のような、接続法と命令法における *-maNga-* の振舞いから、*-maNga-* は TA 標識というよりは、動詞的な性格を有しているといえる。

3.5　TA 標識の文法化

筆者は、上記の 3 つの形式については TA 標識として文法化する過程の途中にあると考える。この点について、スワヒリ語の例をもとに、さらに検証したい。

スワヒリ語には、*-isha*（終える）と *-weza*（できる）という動詞がある。通常は *-isha* と *-weza* には動詞不定形が後続する。

（20）ni-me-kwish[9]-a　kusoma　kitabu

S.1SG-PFT-終える-FV　CL15.読むこと　CL7.本

「私は本を読み終えた。」

（21）n-a-wez-a　kusoma　kitabu

S.1SG-PRS-できる-FV　CL15.読むこと　CL7.本

「私は本が読める。」

-isha と *-weza* は、通常の動詞のように TA 標識のあとにあらわれたのち、動詞基本形を後続することができる。

[9] 肯定の動詞構造においては、*-isha* は不定形接頭辞 *ku-* を伴ってあらわれる。（22）でも同様である。

（22）ni-me-kwish-a　　som-a　　kitabu

S.1SG-PFT$_1$-終える-FV　読む-FV　CL7.本

「私は本を読み終えた。」

（23）n-a-wez-a　　som-a　　kitabu

S.1SG-PRS-できる-FV　読む-FV　CL7.本

「私は本が読める。」

（22）と（23）における　*-isha* と *-weza* のふるまいは、前節まででみた *-tʃéri-*（（4）、（5））、*-roNga-*（（9））、*-maNga-*（（15）、（16））のふるまいと類似している。

Besha (1993: 20-21) は、シャンバー語において TA 標識と動詞語根の間にみられる要素を助動詞と呼んでおり、定動詞が終母音でなく別の語尾[10]で終わるような場合に、その語尾は動詞語根ではなく、助動詞につけられるとしている。Nurse (2008: 59-61) も助動詞について触れており、最終的に TA 標識として文法化する過程として、動詞が助動詞となって TA 標識の入る位置に挿入されると述べている。また、Heine (2003: 594) は TA 標識の文法化の過程として、「進行」のアスペクトは行為を表す要素から派生すると説明している。Mous (2003a: 137) も説明する通り、*-roNga-* は外マア語の動詞語根 *-roNg*（する、作る）に由来すると考えられ、「進行」の TA 標識の文法化のひとつとも考えられる。一方、*-tʃéri-*、*-maNga-* については、語源と考えられる動詞は見つかっていない[11]が、特に *-maNga-* は語尾が -a で終わっており、動詞語幹 + 終母音 -a の形式と類似していることから、動詞と何らかの関係があると考えることもできよう。これらの例から、*-tʃéri-*、*-roNga-*、*-maNga-* は、Besha (1993) や Nurse (2008) のいうところの助動詞と同様のはたらきをしているといえる。ただし、本来動詞語幹に付与される接続法接尾辞 *-e* が *-roNga-* と *-maNga-* に付与されることと、複数の人間に対する命令法の場合に、本来動詞に付与される複数を表す *-ni* が *-maNga-* につけられることから、助動詞よりも動詞性が高いと考えられる。これらのことから、現段階では *-tʃéri-*、*-roNga-*、*-maNga-* は TA 標識としては文法化しておらず、その途中にあるといえよう。

---

[10] Besha (1993: 21) では「未来」のテンスの語尾 *-e*。

[11] *-tʃéri-* については、ふたつの TA 標識の複合形式の可能性もある。

4　結

以上のように、本論文ではマア語でTA標識のあらわれる位置にみられる *-tʃéri-*、*-roNga-*、*-maNga-* という3つの要素について検証と考察を行った。先述の通り、Mreta (1998: 124) はパレ語 *-cheri-* と *-ronga-* について、助動詞のようであるが動詞不定形が後続しないため、TA 標識とみなしている。一方、マア語の場合は、*-tʃéri-* に動詞不定形が後続する例も観察されている。また接続法において、*-roNga-* と *-maNga-* を含む接続法の形式の場合に、動詞語幹に付与される接続法の接尾辞 *-e* が *-roNga-* と *-maNga-* に付与され、それぞれ *-roNge* と *-maNge* となること、複数の人に対する命令法において、本来動詞語幹に付与される、複数を表す接尾辞 *-ni* が *-maNga-* に付与されることから、マア語において *-tʃéri-*、*-roNga-*、*-maNga-* は TA 標識として文法化してはおらず、また助動詞よりも動詞性が高いといえる。しかし、マア語はパレ語から形態・統語体系を借用しており、パレ語では Mreta (1998) により TA 標識として分類されている *-tʃéri-* と *-roNga-* が、借用先のマア語では TA 標識として文法化していないとするのは通時的に統一の取れた分析とは言えない。また、パレ語において、マア語の *-maNga-* に相当する要素の有無についても検証できていないため、今後パレ語の TA の体系について、筆者自身が調査を行い、マア語との比較を行う必要がある。

参考文献

Besha, Mfumbwa Ruth. 1974. *A Socio-linguistic Description of Kimaa and Its Point of Contact with Kishambala.* Unpublished M.A. thesis. Dar es Salaam: University of Dar es Salaam.

_____. 1993. *A Classified Vocabulary of the Shambala Language with Outline Grammar*. Tokyo: ILCAA (Institute for the Study of Languages

Comrie, Bernard. 1976. *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press.

_____. 1985. *Tense*. Cambridge: Cambridge University Press.

Green, E. C. 1963. “The Wambugu of Usambara”. *Tanganyika Notes and Records* 61: 175-188. Dar es Salaam: Tanganyika Society.

Mous, Maarten. 1994. “Ma’a or Mbugu.” In Bakker, P. and M. Mous, eds. *Mixed Languages : 15 Case Studies in Language Intertwining*, 175-200. Amsterdam: IFOTT (Institute for Functional Research into Language and Language Use).

_____. 2003. *The Making of a Mixed Language: The Case of Ma'a/Mbugu*. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins.

Mreta, Abel Yamwaka. 1998. *An Analysis of Tense and Aspect in Chasu: Their Form and Meaning in the Affirmative Constructions*. Humburg: LIT verlag.

Nurse, Derek. 2008. *Tense and Aspect in Bantu.* Oxford: Oxford University Press.